



Press Release

2018年3月発信

報道関係者各位

軽井沢現代美術館2018年の展示企画をお知らせいたします。詳しくは広報担当までお問い合わせくださいませ。

1F常設展示室 4月26日(木)～11月25日(日)

海を渡った画家たち — 時の共演 —

【概要】

めまぐるしく流転する斬新な表現や、高値で作品が取引されるマーケットが賑わいを見せる世界のアート・シーン。

ここ日本でもすっかり「現代美術」という言葉が耳に馴染み、ハイ・カルチャーとサブ・カルチャーが入り混じるハイブリッドな様相は、海外からも熱い注目を集めています。

しかしその舞台の中心が、未だ欧米にあるのはなぜでしょうか。

「世界」と「日本」を隔てる壁は、さかのぼれば戦後を生きる画家たちの前にも同様にそびえ立っていました。海外へ一時的に渡航した作家らによってもたらされた西洋趣味への傾倒に拍車がかかっていた、当時の日本。一方では、かりそめの流行に疑問を呈し、あえて異国の美術界の荒波へ身を投じた海外組や、彼らに刺激を受け、国内で独創性に富んだ作品を生み出した者も現れました。

不器用なほどひたむきに生きた画家たちの鬼気迫る作品群が、私どものコレクションの中心となっています。当館の創設者・谷川憲正（東京・海画廊 創業者）には、美術館の開館が実現した後も描き続けたもうひとつの夢がありました。それは、私たちと同時代に生きるアーティストと、戦後美術の精鋭たちとのコラボレーション。

アートにおいてもグローバル化が進む近年、諸外国の追従ではない地盤を築く方法とはいかなるものなのか。いにしへのパイオニアたちは、いち早くこうした問題意識を持ち、後世へしっかりと道を示していたのです。

奏でられる音色は、創作の喜びや苦しみ、あるいは遠い故郷を想うノスタルジーかもしれません。数十年の時を超え、約50点の過去と現在の「いま」が果たす夢の共演を、どうぞ高覧ください。

● 出展作家

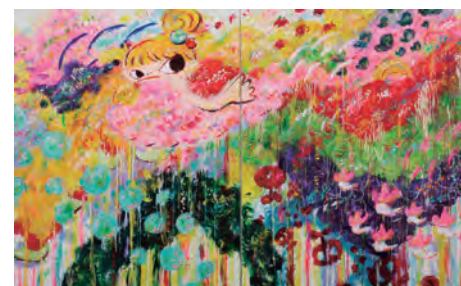
草間彌生、白髪一雄、菅木志雄、田中敦子、奈良美智、名和晃平、間部学、宮脇愛子、村上隆、ロッカクアヤコ（五十音順） 他



「世紀の詩」
1991年 キャンバスに油彩 80×100cm
間部学



「WORK 1968」
1968年 合板に合成樹脂エナメル塗料、キャンバス 直径100cm
田中敦子



「Untitled」
2015年 キャンバスに油彩 162.1×260.6cm
ロッカクアヤコ

掲載ご希望の方は広報へお問い合わせください。

海画廊（軽井沢現代美術館 東京事務所）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店4階

TEL/FAX 03-3233-3359 E-MAIL info@umigallery.net (広報担当: 稲村・丸山)



1F常設展示室 特集展示 4月26日(木)～11月25日(日)

荒川修作 — 超絶次元! —

【概要】

慎重に配置された直線や円弧、矢印、点などの図形。
その上に書き込まれた、ステンシル文字や筆記体によるテキスト。

荒川修作の作品に見られる「言語」は「形象」を説明するものではなく、また後者は前者の図解でもありません。「文字」と「記号」が複雑に共存する「図式絵画」を前にした時、私たちはその仕掛けにしばしば困惑すると同時に、謎めいた意味を理解したいと願います。
そして、こうした鑑賞者の思索や参与ゆえに成立する作品こそ、作家が目指したものでした。

「=(イコール)」では結びつかない、「意味するもの」と「意味されるもの」。
パラドックスの果てに現れてくるものは、絵画の持つ二次元性や、私たちが生きる三次元空間を超越した、知覚やイメージが重層的に絡み合った多次元の芸術世界なのです。

平面作品やオブジェを出発点とした創作は、晩年に近づくにつれて、身体の知覚によって構築される「空間」を探求する建築プロジェクトへと発展していきました。

「死はオールドファッションである。」

公私共にパートナーのマドリン・ギンズとの共著『意味のメカニズム』の序文に記された、印象的な一文です。「天命反転」という命題の解を導くため、数々の思考実験に生涯を捧げたひとりの芸術家。
このたび、「海を渡った画家たち - 時の共演 -」の特集展示として、渡米直後の貴重な初期作品を含む約15点をご紹介します。模索の先に見える未知なる世界的一幕を、感じていただけましたら幸いです。

●出展作家 荒川修作



「無題」
1966年 キャンバスに油彩 114×74.5cm
荒川修作



「Shall we dance or may I come in?」
1971年 紙に鉛筆、水彩 101.5×76cm
荒川修作

掲載ご希望の方は広報へお問い合わせください。

海画廊(軽井沢現代美術館 東京事務所)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店4階

TEL/FAX 03-3233-3359 E-MAIL info@umigallery.net (広報担当: 稲村・丸山)



2F企画展示室 4月26日(木)～11月25日(日)

草間彌生 — 近作版画を中心に—

【概要】

「アート」を凌駕し、ファッションやライフスタイルなど、「文化」という巨大な枠組みにおけるアイコンとして、日々私たちに驚きとパワーを与え続ける前衛芸術家、草間彌生。

反復し増殖するドットやネット、鮮麗な南瓜や花は、永遠のテーマである「命」や「愛」を雄弁に語るとともに、「孤独」や「強迫観念」との葛藤にもがく作家の姿をも同時に映し出しています。

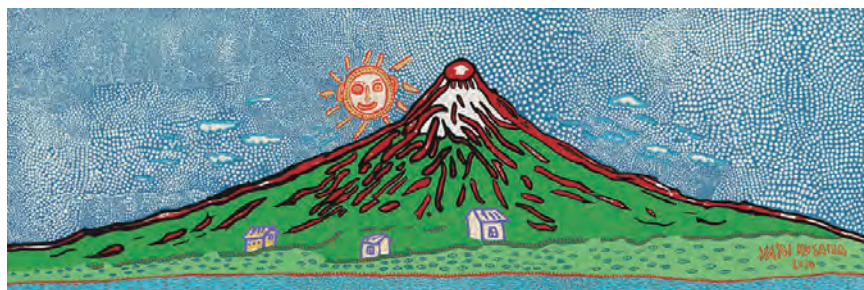
このたび当館では、草間彌生が手がけた初の浮世絵版画《七色の富士》、《富士は心の故郷》、《わが心の富士はかたる》を展示いたします。

伝統ある木版画技法を用い、アクリル絵画が版画として新たに生まれ変わった《七色の富士》。山頂付近から顔を出す太陽は、私たち、あるいは世界中のあらゆる万物に対して微笑みかけているかのようです。稜線が描く豊かな裾野や、穏やかにさざめく水面、富士山の背後からあふれ出る14,685個の水玉に至るまで、一つひとつ原画に忠実に彫り起こされています。

さまざまな恐怖に抗うため、ただひたすらに芸術に精魂を注ぐ。迷いなくこう語る草間彌生は、90歳を目前とした今、絶えず七変化しながら私たちを魅了する日本の象徴「富士山」に自らを重ね合わせ、挑まずにはいられなかったのかもしれない。

最初期のシルクスクリーン《靴をはいて野にゆこう》、《幻の野に立ちて》、《野に忘れた帽子》を始め、これまでの画業を振り返る版画作品約20点とともに、生命力みなぎる世界観をお楽しみくださいませ。

● 出展作家 草間彌生



「命の限り愛してきた私の富士山のすべて」
2015年 木版 30.3×90cm
草間彌生



「野に忘れた帽子」
1981年 シルクスクリーン 41×51.8cm
草間彌生

掲載ご希望の方は広報へお問い合わせください。

海画廊(軽井沢現代美術館 東京事務所)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店4階

TEL/FAX 03-3233-3359 E-MAIL info@umigallery.net (広報担当:稲村・丸山)